



つわりの推移ならびに重症度と自律神経活動度との関連

竹林, 桂子

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2011-03-25

(Date of Publication)

2011-09-08

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5139

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005139>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	竹林 桂子
博士の専攻分野の名称	博士（保健学）
学 位 記 番 号	博い第 5139 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 23 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

つわりの推移ならびに重症度と自律神経活動度との関連

審 査 委 員

主 査	教 授	松尾 博哉
	教 授	齋藤 いずみ
	教 授	高田 哲

論文内容の要旨

専攻領域 看護学

専攻分野 家族・在宅看護学

氏 名 竹林桂子

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を()を付して併記すること。)

つわりの推移ならびに重症度と自律神経活動度との関連

論文内容の要旨 (1,000字～2,000字でまとめること。)

妊娠に伴う嘔気・嘔吐・食欲不振などのつわりは、妊娠初期の妊婦の60～80%が経験し、妊娠22週までに9割の妊婦でその症状が自然軽快するとされている。しかし、嘔気が強いほど身体的なquality of life(以下QOLとする)は低く、つわりの重症化は身体的にも精神的にもQOLの低下をもたらす。つわりの根本的なトリガーは、胎盤より産生されるヒト絨毛性ゴナドトロピンあるいはエストロゲンであると考えられている。しかし、つわりの発現には神経系・内分泌系・免疫系が複合的に関与することが示唆されており、これらの相互関連を含め、その機序はなお不明な点が多い。また、妊娠中は妊娠を維持するために母体の循環動態が大きく変化するが、その状態に適応するために自律神経系の調節がその役割の一端を担うことが明らかとなっている。さらには、不安やストレスといった心理社会的要因が、自律神経機能と密に関連し、その働きを修飾することから、それらの要因が自律神経への影響を介してつわりの重症化・遷延化にかかわるかどうか興味を持たれた。そこで、本研究では、つわりの推移ならびに重症度と自律神経活動度および妊婦の持つ心理社会的要因との関連性を縦断的に検討した。

対象者は、徳島県にある第三次医療機関および診療所各1施設へ通院中の妊娠初期の妊婦で、研究への参加に同意し、継続的にデータが得られた31名であった。調査には、自記式質問紙(悪阻指数、日本版STAIを含む)を用い、自律神経活動度の評価は心拍変動周波数解析により行った。統計学的分析にはエクセルX for MACを用い

て検討した。なお、本研究は、研究協力機関臨床研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

その結果、悪阻指数は、妊娠8-11週で最も高く、妊娠週数とともに減少した。自律神経活動度では、低周波成分(Low Frequency:LF)は妊娠週数による変化は認められなかった。高周波成分(High Frequency:HF)は8-11週に最高値を示し、妊娠週数とともに低下し、特に、8-11週と16-19週の間で有意に低下した。心拍数(Heart Rate:HR)は、妊娠週数とともに増加し、8-11週と16-19週との間で有意に増加した。STAI状態不安は、妊娠週数とともに低下し、8-11週と16-19週との間で有意に低下した。STAI特性不安は、週数による有意な変化は認められなかった。つわりと妊婦の持つ心理社会的要因との関連性では、悪阻指数は唾液分泌増加群で高い傾向にあったが、他の要因では明らかな関連性を認めなかった。また、心理社会的要因と自律神経活動度との関連でも明らかな関連性は認められなかった。

つわりの重症化と自律神経活動度との関連では、LF、HF、LF/HF、HRのいずれにおいても2群間に有意な差は認められなかった。つわり重症群は、非重症群よりもSTAI状態不安が有意に高かった。

つわりの遷延化と自律神経活動度との関連では、LF、HF、LF/HF、HR、STAI状態不安・特性不安のいずれにおいても2群間に有意な差は認められなかった。

つわりの推移は自律神経活動度、特に副交感神経活動のそれとほぼ一致した。妊婦の不安は、妊娠に伴う自律神経活動の生理的な変化に加えて、その活動度を修飾し、つわりの重症化に影響を及ぼす可能性が示唆された。つわりの遷延化については、今回有意差は認められなかったが、妊娠経過とともに、自律神経活動度が交感神経優位へと生理的に変化していくにもかかわらず、つわり遷延群ではLFが低く、LF/HFが小さいことから副交感神経優位の状態が持続し、妊娠という状況への生理的適応がうまくいっていない可能性を否定できない。

産科医療従事者は、できるだけ妊娠週数の早い時期から、つわりの程度を客観的に把握した上で、妊婦の個別性、特に妊婦が持つつわりのリスク要因を踏まえ、つわりの重症化・遷延化への注意を十分に払いながら、適切な保健指導を提供することが求められる。

今回の研究から、悪阻指数による自己評価および自律神経系の解析は、つわりの程度を客観的に捉える有効な手段の1つとなりうると思われた。

指導教員氏名: 松尾博哉

(別紙1)

論文審査の結果の要旨

氏 名	竹林 桂子		
論 文 題 目	つわりの推移ならびに重症度と自律神経活動との関連 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	松尾 博哉
	副 査	教授	齋藤 いずみ
	副 査	教授	高田 哲
	副 査		印
要 旨			
つわりの推移ならびに重症度、妊婦の持つ様々な要因のつわりへの関わりを自律神経活動度より縦断的に評価した。対象は、妊娠初期の妊婦31名である。調査には、自記式質問紙、悪阻指数、日本版STAI、心拍変動周波数解析を用いた。悪阻指数は、妊娠6-7週で最も高く、妊娠週数とともに減少した。自律神経活動では低周波成分(LF)は8-11週に、高周波成分(HF)は6-7週と8-11週にピークがあり、妊娠週数とともに低下した。特に、HFは8-11週と16-19週の間で有意に低下した。LF/HFは、妊娠週数とともに上昇した。つわり重症群は、非重症群よりもLF、HF、LF/HFが高く、状態不安が有意に高かった。また、つわり遷延群は、非遷延群よりもLF、HF、LF/HFが高く、特性不安が有意に高かった。つわりの推移は自律神経活動度のそれとほぼ一致し、特に副交感神経活動の上昇と低下が顕著であった。つわりの重症度や遷延化には、不安の強さならびに自律神経活動度が関連する。 よて、学位申請者の竹林桂子は、博士(保健学)の学位を取得したと認められる。			
掲載論文名・著者名・掲載(予定)誌名・巻(号)、頁、発行(予定)年を記入してください。 つわりの推移ならびに重症度と自律神経活動との関連。 竹林桂子、松尾博哉、神戸大学大学院保健学研究科紀要、2011、3月発行予定			